

乳幼児の生活実態と保護者の子育て意識について

～川崎市乳幼児の生活実態調査から～

幼児教育センター指導主事研究会議

根津 牧子 小林 朝香 青柳 道子

I 主題設定の理由

近年、少子化や核家族化、情報化などの急速な社会の変化に伴い、乳幼児を取り巻く環境も大きく変化してきた。平成 15 年度に実施した乳幼児の生活実態調査でも、数値は少ないものの「子育てが楽しくない」「子どもがかわいいと思えない」「話し相手がいない」など子育ての背景が気になる回答をした保護者がいた。

幼児教育センターでは、0歳から就学前の子どもたちの心身ともに健やかな成長を支援していくための事業を行っているが、この実態調査を実施することにより、「乳幼児の生活」や「保護者の子育て意識」の実態を把握し、今後の子育て事業に生かしていきたいと考える。

また、この川崎市乳幼児の生活実態調査は、5年ごとに実施される経年調査として、位置づいている。

II 研究の内容

1 実態調査実施の経緯

| 平成 17 年度 | 平成 18 年度 | 平成 19 年度 | 平成 20 年度 |
|-----------------------------------|---------------------|---------------------------------------|----------------------------------|
| 【調査に向けて】 ・調査計画、集計方法等の検討 | → ・調査項目の検討・設問の作成 | ※【作業部会において】 ・設問内容の検討 ○調査依頼準備～依頼 | ・調査依頼 ・調査用紙配付 ・調査実施～調査用紙回収 |

※作業部会（3回開催）

〈構成員〉健康福祉局（4）、保育園長（2）、幼稚園長（2）、幼児教育センター（2） 計 10 名

2 実態調査の概要

- (1) 調査目的
- 川崎市の乳幼児の生活実態を探る
 - 保護者の子育て意識を探る
 - 川崎市の子育て支援に係る関係各機関で活用するための基礎資料を作成する

- (2) 調査対象
- 川崎市内 7 区に居住する 0 歳から就学前の乳幼児をもつ保護者 **3,980 名**
 - ・川崎市の就学前の乳幼児人口の比率に従い、以下のように対象数を定めた。
 - (内訳) 公私立保育園 660 世帯
 - 公私立幼稚園 1,250 世帯
 - その他 2,070 世帯
- (保健福祉センター、地域子育て支援センター)

- (3) 調査実施時期 ○平成 20 年 6 月

- (4) 調査の方法 ○質問紙法によるアンケート調査

(配付、回収方法) 関係機関の協力を得て、配付回収を行った。

- ・ 保育園、幼稚園…在園児の各家庭に配付、園でまとめて回収
- ・ 保健福祉センター…乳幼児健診のお知らせとともに郵送、受診時に回収
- ・ 地域子育て支援センター…センターに来所の保護者に配付、回収箱で回収

(5) 調査内容

- 属性
 - ① 保護者の属性…子どもとの関係、同居家族
 - ② 子どもの属性…子どもの年齢、子どものきょうだい
- 生活実態
 - ③ 生活環境…就園状況、居住年数、母親の就労状況
 - ④ 基本的な生活…平日の起床時刻、就寝時刻、睡眠時間、朝食について(有無、誰と、時刻、朝食無理由)、夕食について(誰と、時刻)
 - ⑤ 余暇…テレビ(ビデオ・DVDを含む視聴の有無、時間)ゲーム(利用の有無)
 - ⑥ その他…習い事・おけいこ事(種類、理由)よく出かける所(回数、場所、利用理由)
- 子育て意識 ⑦ 母親の子育て意識…大変さ、悩み、相談、協力者、楽しさなど父親について(子育てへの関心、協力、期待)

(6) 回収結果

○ 配付数…3,980 回収数…3,182 回収率…79.9%

(7) 年齢別内訳

| | | | |
|-------|-----------------------|------|---------|
| ○ 0歳 | (平成19年11月～平成20年5月生まれ) | 248名 | (7.8%) |
| ○ 0歳児 | (平成19年4月～平成19年10月生まれ) | 263名 | (8.3%) |
| ○ 1歳児 | (平成18年4月～平成19年3月生まれ) | 571名 | (17.9%) |
| ○ 2歳児 | (平成17年4月～平成18年3月生まれ) | 423名 | (13.3%) |
| ○ 3歳児 | (平成16年4月～平成17年3月生まれ) | 500名 | (15.7%) |
| ○ 4歳児 | (平成15年4月～平成16年3月生まれ) | 629名 | (19.8%) |
| ○ 5歳児 | (平成14年4月～平成15年3月生まれ) | 548名 | (17.2%) |

* 年齢ごとの配付数については、各機関に任せため把握できていない。

3 調査の集計に当たって

この調査では、歳児ごとに分けたデータを基本として集計作業を行った。

4 集計・分析について

- 基礎集計…業者委託
- データ処理…エクセルソフトを使用
- 数値の取り扱いについて
 - ・ 回答率(%)は、小数点以下第2位を四捨五入し、小数点以下第1位までを表記した。そのため、回答率の合計が100%にならないものもある。
 - ・ 回答選択数を指定した設問に対して、指定数を超えて回答した場合も有効と見なして集計処理を行った。

Ⅲ 調査結果からとらえられたこと

1 乳幼児の生活実態から

睡眠について

○5年前より早寝・早起き

- ・7時までに起床する割合の最も高いのは1歳児で54.6%、次いで3歳児の54.4%で、0歳児から3歳児では45%以上の子どもが7時までに起床し、4歳児以降になると「7時～8時」に起きるという回答が最も多い。
- ・前回の調査結果との比較で見ると、どの年齢を見ても早起きの傾向となっていることがわかった。特に3歳児では、7時までに起床する幼児の割合が29.9%から54.4%と24.5ポイント増加し、大きな変化が見られた。また、就寝時刻では前回の調査結果でどの年齢においても「21時～22時」に寝るという回答が最も多かったのに対し、今回の調査では、21時までに寝る乳幼児の割合が、最も変化の大きい2歳児で13.5%から40.9%と27.4ポイント増加し、変化の少ない0歳でも15.3%から35.1%と19.8ポイント増加しているという結果となった。これらのことから、“早く寝て早く起きる”という乳幼児の生活実態をとらえることができた。

食事について

○朝食はほとんど毎日

- ・“朝食について”は、1歳児以降になると「きちんと毎日食べている（週7日）」子どもが、どの年齢でも80%以上の割合を示し、「週5～6日」を合わせるとほぼ95%以上となっている。
- ・前回の調査結果との比較から、3～5歳児で「毎日きちんと食べている」が64.7%から83.9%と19.2ポイント増加しており、毎朝食事をとるといった習慣が定着してきている傾向がうかがえる。

○朝食は子どもだけの場合も…夕食は大人と一緒に…

- ・“誰と一緒に食事をとるか”については、朝食では3歳児から年齢が増すごとに「きょうだいで食べる」「一人で食べる」といった子どもだけの食事形態が増加しており、5歳児で31%を示している。また、夕食については年齢が増すごとに、「家族がそろって」「父親と子どもで」「母親と子どもで」など大人と一緒に食事をしている家庭が増加し、1歳児では87.5%を示し、2歳児以降では90%を超えているという結果となった。

余暇について

○1歳児以降の視聴時間は「1時間～2時間」

- ・テレビ（ビデオ・DVDを含む）視聴の平均時間について、0歳を除くどの年齢においても「1時間～2時間」が多く、70%以上が3時間以内の視聴となっている。
- ・「5時間以上」のテレビ視聴時間について見てみると、2歳児で2.8%と最も高い割合を示している。
- ・ゲーム利用の有無については、「よくしている」「たまにする」を合計すると、2歳児は8%なのに対し、3歳児では22.8%、4歳児では41.5%、5歳児では59.1%と年齢が増すごとに15ポイント前後の増加が見られる。

習い事・おけいこ事について

○3歳児以降で半数以上している

- ・習い事・おけいこ事について前回の調査結果と比べると、「していない」という割合が0～2歳児で87.9%から74.4%と13.5ポイント、3～5歳児で55.3%から40.7%と14.6ポイント減少している。早い時期から習い事を始める子どもが増加している傾向があらわれ、スイミング、体操教室などといった習い事の項目を見てもわずかずつではあるがそれぞれのポイントが高くなってきているという結果となった。

子どもとの外出について

○0～2歳児は公的な場を利用

- ・買い物や家の用事以外で、平日出かける回数は、0歳～2歳児の方が3歳児～5歳児に比べて多い。特に一週間（土・日を除く）に「5回以上」が最も多いのが1歳児であった。
- ・外出先について、0歳～2歳児では「近所の公園や広場」「子育て支援センター」が上位に挙げられている。これは、子ども同士、あるいは保護者同士の触れ合いの場、安全に遊べる場など、保護者のニーズに応じられる場に限られるため、公的な場の利用につながっているのではないかと考えられ、地域で公的な場が果たす役割の大きさが読み取れる。
- ・幼稚園などの集団生活が始まる3歳児からは、行動の幅が広がってくるため公的な場の利用が減る傾向が見られた。外出先としては「近所の公園や広場」「友達の家」「祖父母の家」が上位に位置している。

2. 保護者の子育て意識から

母親の意識から

○子育ては、とても楽しい

- ・“子育ての大変さ”について、0歳から2歳児にかけて「いつも大変であると思う」の回答が増加し2歳児をピークに減少し始めている。
- ・前回調査との経年変化を見ると、「いつも大変であると思う」の年齢別割合は、最も変化の少ない3歳児で34.5%から20.8%、4歳児で33.4%から19.7%とそれぞれ13.7ポイント、最も変化の大きい0歳児では34.4%から14.6%と19.8ポイント低くなっており、他の年齢を見ても今回調査の方が低くなっている。このことから、“子育てが大変”と感じている割合は低くなっている傾向にあることがうかがえる。
- ・“子育てを楽しんでいるか”については、「とても楽しい」という回答が0歳児で最も多く38.5%を示している。
「とても楽しい」「楽しい」「時々楽しい」を合わせると、どの年齢でも94%以上の保護者が育児に楽しさを感じているという結果であった。
- ・前回の調査結果と比較してみると、どの年齢も「とても楽しい」が10ポイント以上増加しており、特に0歳児では9.9%から38.5%と28.6ポイントと最も大きい変化となった。

○入園について迷い・悩むのは0歳から

- ・“子育ての迷い・悩み”の項目として、「保育園・幼稚園などの入園に関すること」について見ると、0歳で21.8%と最も高い結果であった。

○0歳児と1歳児の間に変化あり

- ・“子育てが大変であると感じるとき”については、0歳・0歳児は「自分の時間がもてないとき」が最も多く、1歳児以降は「子どもが言うことをきかないとき」となり、5歳児まで結果は変わらない。
- ・“子育ての迷い・悩み”について、0歳・0歳児では「食事」「健康に関すること」の割合が高く、1歳児以降は「しかり方」「しつけ」の順で5歳児まで上位は変わらない。0歳児までと、行動が活発になっていく1歳児以降では、子育ての迷い・悩みが大きく異なることがうかがえた。
- ・“育てるにあたって大切にしていること”については、1位回答はどの年齢も「優しい気持ちをもてる子どもにする」で共通しているが、2位回答では、0歳・0歳児は「体の丈夫な子どもにする」が挙げられ、1歳児以降では「社会のルールを守れる子どもにする」であり、ここでも0歳児までと1歳児以降とは回答内容に違いが見られた。

父親について

○父親の家事・育児に満足

- ・母親が感じる父親の子育てへの関心は「とてもある」「ある程度ある」の合計で見ると、0歳の割合が96.2%と最も高く、年齢が増すごとに徐々に低くはなるものの、5歳児でも90.1%以上となっている。0歳は誕生直後であり、父親の関心が高いととらえている母親が多く、「まったくない」の回答は0%であった。
- ・経年変化を見ても、“父親の子育てへの関心”が若干高くなってきている傾向が見られる。
- ・“子育てや家事への満足度”では「とても満足している」「おおむね満足している」を合計すると、0歳が82.5%と最も高く、子どもの年齢が増すごとに満足度は低くなっていく。
- ・経年変化では、「とても満足している」が0～2歳児で22.5%から25.2%に2.7ポイント、3～5歳児で14.4%から17.9%と3.5ポイント、「おおむね満足している」は、0～2歳児で43.1%から52.3%と9.2ポイント、3～5歳児で36.4%から51.8%と15.4ポイント増加している。
- ・“父親の家事・育児への参加”については、「よくする」「時々する」を合わせると0歳で92.0%と最も高く、子どもの年齢が増すごとに徐々に低くはなるものの、5歳児でも80%となっている。

○父親に対する母親の期待は「子どもと遊んで」

- ・0歳から5歳児までどの年齢も“父親が主にする事柄”の1位回答には「子どもと遊ぶ」が挙げられている(63%～76%)が、“母親が父親に期待すること”の1位回答にも同じように「子どもと遊んでほしい」(40%前後)が挙げられている。
- ・“母親が父親に期待すること”の2位回答は、年齢による特徴があらわれており、0歳で「話を聞いてほしい」(37.5%)、で一日子どもとかかわっている母親が、話し相手の役割を父親に求めている様子がうかがえる。0歳児、1歳児になると育児の忙しさから「家事や育児を手伝ってほしい」となり、2歳児では子どもの動きや言葉も活発になっていくことなどから「育児から離れられる時間を作ってほしい」という結果となったと考えられる。4歳児、5歳児になると「ねぎらいの言葉をかけてほしい」という回答が増え、母親の“大変さを理解してほしい”“精神面での支えが必要”という思いが表れる結果となった。

IV おわりに

○今後の調査に向けて

本調査は、幼児教育センターにおいて今後の事業を推進していくための基礎資料を得るため、また、川崎市の子育て支援に係る関係各機関で活用するための基礎資料として実施したものである。今回の調査にあたっては、調査対象の内訳を川崎市の就学前の乳幼児人口および就園状況の比率に合わせたことから、前回調査とは母集団が異なっているものの、経年変化では川崎市の乳幼児の生活実態や保護者の子育て意識について、様々な変化や課題を読み取ることができた。この結果を学校関係者はもちろんのこと、子育てに係るすべての関係機関に提供し、乳幼児期だけではない先を見通した子どもの育ちに役立てられるよう連携を図っていきたくと考えている。

また、今後の調査の実施にあたっては、それぞれの機関において有効に活用できる基礎資料となるよう今回の調査の経緯を活かしながら関係各機関との連携を十分に図っていきたく。

川崎市の幼児教育、子育て支援関係機関では、既に様々な支援事業を実施しているが、この調査が各機関の事業の一助になれば幸いである。

最後になりましたが、ご多用の中、作業部会・アンケート調査にご協力いただきました関係各機関の皆様、研究をすすめるに当たりご支援ご助言をいただきました皆様に、心より感謝いたします。

【作業部会】

<平成19年度>

| | |
|----------------------|--------|
| 健康福祉局こども事業本部企画調整担当主幹 | 中村 孝也 |
| 健康福祉局保育運営課主幹 | 神尾 南枝 |
| 健康福祉局こども家庭課主査 | 堀田 彰恵 |
| 健康福祉局健康増進課主任 | 荒平 和子 |
| 川崎市千年保育園長 | 松本 みち |
| 川崎市平保育園長 | 田中 眞智子 |
| 川崎市立新城幼稚園長 | 金井 久美子 |
| 川崎市立生田幼稚園長 | 内田 ひろ子 |

【データ処理協力】

| | |
|------------------|-----|
| 川崎市立川崎総合科学高等学校教諭 | 原 満 |
|------------------|-----|

【参考文献】

| | | |
|--------------------|----------------|-------|
| 「第3回幼児の生活アンケート報告書」 | ベネッセ教育研究開発センター | 2006年 |
|--------------------|----------------|-------|

【指導助言者】

| | |
|----------|-------|
| 大妻女子大学教授 | 柴崎 正行 |
|----------|-------|